

## 信仰は善い行いと共に働く マタイ5:13~20 / 李正雨師

教団または教会によって、それぞれが自分だけの色を持っていると思います。それでは、私たちのルーテル教団、私たちルーテル教会は、何の色を持っていると思いますか。先日、私はルーテル教会は優しいという話を聞きました。教会が信徒の方々に強制することや禁じることも特になく、牧師が信徒の方々に「何かをなさい、何かをしてはいけない」と勧めることもほとんどないからです。だから、ルーテル教会は優しいと思われるようです。さらに、私たちルーテル教会は、「アディアフォラ(ἀδελφοφιλία)」というものも大事に思っています。ギリシャ語であるアディアフォラは、重要ではないもの、本質的なものではないという意味を持っています。反対に「ディアフォラ(δελφοφιλία)」は重要なもの、本質的なものという意味でしょう。これを簡単に説明すると、このようなものです。ルターは、改革において教会の様々な伝統を受け入れました。それで、私たちルーテル教会の礼拝では、カトリック的な要素が多いのです。しかし、長老教会の改革者カルバンは、教会の伝統、礼拝、音楽などのような教会の遺産を受け入れませんでした。当時の教会のすべては改革されなければならないと思ったからです。教会の伝統や遺産を受け入れたり、受け入れなかったりすること。これがアディアフォラです。聖書が禁じたり、守りなさいと語ったりしたのではないので、ルターとカルバンは自分の考えによって自由にこれを選択することができたのです。ルーテル教会では、このアディアフォラ、本質的でないことについて、各自の信仰と考えに任せています。代表的なものとしては、お酒、タバコ、主日の守り、献金などがあるでしょう。そうすると、ルーテル教会が他の教会よりも優しくて柔軟に見えるようです。むしろ強制することが多くないので、中道半端に見えることもあるでしょう。

しかし、このようなことを簡単に思っただけではいけません。ゆだねられたこと、自由なものには責任がついて来るからです。ルターは、自分の論文である「キリスト者の自由」でこのように言います。「キリスト教的人間はすべてのものの上に立つ自由な君主であって、だれにも服しない。キリスト教的人間はすべてのものに仕える僕であって、だれにでも服する。」矛盾のようなこの言葉は、何がキリスト教的な人なのかを説明してくれる言葉です。誰も私たちの自由を束縛することはできず、私たちは誰にも服しません。しかし、同時に私たちは、自らがみんなに仕える僕にならなければなりません。誰にも服しませんが、みんなの僕になって仕える者！これがルーテル教会が語り、教えているキリスト者の姿です。ルーテル教会は優しい、厳しくないと思うこともありますが、実はそうではありません。「自らが低くなって、隣人に仕える人になりなさい。」これが私たちルーテル教会の信徒に求められる事項なのです。

行いにおいても、同じです。みんなの僕になりなさいと教えているルーテル教会には、行いが無いわけではないでしょう。しかし、ルーテル教会は、行いが現れることを嫌がっています。これは、ルターの宗教改革時代の背景とも関係があります。ルターの時代には、行いが強調されていました。献金と苦行、修道と断食が強調されていた時代でした。ルターが入った聖アウグスティヌス修道院も、このようなことを強調し、ルターは修道院で厳しい行いを学びました。しかし、時間が経つにつれ、ルターはこれらの行いが何の喜びも与えていないということが分かります。苦行と善い行いが厳しくなればなるほど、救いに対する確信は遠ざかっていました。信仰よりは行い、すなわちイエス様の約束よりは自分の行いにより集中していたからです。それでルターは、行いよりも信仰が重要であることを、救いは行いではなく信仰によって得られることを悟り、教えました。

それにもかかわらず、ルターは、行いが排除された信仰を語りませんでした。ルターにとって信仰と行いは、まるでこの千円の札と同じでした。この札には表と裏がありますが、表も裏も同じ千円です。表または裏の面で払うとしても、価値は変わりません。このように信仰というものは、善い先いと離れません。信仰の者が善い行いをしないことができるか。つまり、行いのない信仰というものが有り得るか。ルターにとって、そして私たちルーテル教会にとって、そんな信仰はありません。必ず信仰は、善い行いを伴います。

今日の福音書が私たちに語っているのもこのようなものだと思います。13節の言葉です。「あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられよう。もはや、何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。」塩気がない塩を料理に入れる人はいないでしょう。私も毎日家族のために料理を作っていますが、塩が入っていない料理を出したことは一度もありません。いくら高価な皿に乗せ、素敵なテーブルセッティングをすることも、塩が入っていない料理なら、誰でも二度と食べようとする人はいないでしょう。行いがいい信仰も同じでしょう。知識的に立派で、素敵なフレイズで飾ったとしても、善い行いがなければ、隣人への愛がなければ、その信仰は死んだ信仰と同じです。

あなたは岩塩、石塩というものはご存知でしょう。日本や韓国の場合は、海が近いので、海から塩を得ていますが、海と遠い内陸地方の人々は、鉱山から塩を得ています。大昔海だった所が陸地になった所が多いので、思ったより多くの国々が塩の鉱山を持っていて、岩塩を採掘して使っているそうです。ところが、この岩塩の中には、雨や日当たりによって塩気が洗われた岩塩もあるそうです。そんな岩塩は、建物を建てる時に泥と混ぜて使ったり、砂利のように道に敷くものとして使われたそうです。今日の福音書での塩、行いのない信仰も、そのような扱いを受けるのです。誰にも何の影響も与えず、神様の働きにも使われないものになるのです。投げ捨てられるしかないもの。これが行いのない信仰です。

15節の言葉も同じ意味だと思います。「ともし火をともして升の下に置く者はいない。燭台の上に置く。」ともし火を灯したことには、目的があるでしょう。暗い所を明らかにすることが目的です。だから、ともし火を升の下ではなく、燭台の上に置くのです。私たちの善い行為も同じです。私たちは神様の言葉に従い、神様の言葉は私たちの隣人に向かっています。「隣人を自分のように愛すること」、イエス様はこれを最高の戒めだと言われました。ですから、私たちの信仰には、いつも善い行いがついてくるのです。16節でイエス様はこう言われます。「人々があなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。」イエス様がこう言われた理由は何でしょうか。キリスト教の信仰は、善い行いを伴うから、善い行いと共に働いているから、こう言われたのだと思います。

このようなことを念頭に置いて、今日の福音書20節を見てみましょう。そうすれば、イエス様がなぜこんな厳しい話をなさったかが分かるようになると思います。イエス様は20節に「あなたがたの義が律法学者やファリサイ派の人々の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の国に入ることができない。」この言葉の意味は何でしょうか。律法学者やファリサイ派の人々より善い行いをしなさいということでしょうか。それではなく、善い行いのない信仰に気を付けなさいという御言葉です。何もしない信仰は、決して律法学者やファリサイ派の人よりもまさらないということです。

私たちの社会が多くの変化を経て、私たち信仰の人の生活にも多くの変化が生じました。数え切れないほどの教会が生まれ、それぞれの聖書の解釈によって教会の教えも多様になりました。説教だけでなく、礼拝の音楽も、集会のスタイルも変わりました。聖書を黙想したり、勉強したりしています。音楽と社会福祉をもって教会で講演会を開いたり、バザーをしたり、英語で聖書の学びをしたりしています。宣教旅行に行ったり、エルサレムを訪問したりしています。本当に様々なことを行っています。それで、私たちは、このようなことに熱心に参加するのが、私たちの信仰のすべてであると思いがちです。しかし、このようなものは私たちの「アディアフォラ、非本質的なもの」です。私たちの信仰の本質は、イエス様の言葉に従うことにあります。そしてそれは、必ず隣人への愛、善い行いをもたらします。私たちの信仰の生活の中で善い行いが起こっていますか？隣人のために祈り、彼らのことを助けていますか？今日の福音書は、今、私たちがしている信仰生活を点検させてくれるものだと思います。この言葉が私たちの信仰をもう一度振り返させることができますように。私たちの生活で善い行いが起こりますように。神様が私たちを通して善い行いを行われますように、主の御名によって祈ります。アーメン